

高齢者デイサービスにおける園芸療法

安達みどり¹ 横田優子² 長谷川佳奈子³ 荻野水城⁴

¹ 社会福祉法人清章福祉会清住園

² 社会福祉法人桑の実園福祉会夜間型デイサービスセンター灯里

³ デイサービスセンターつどい岩岡 ⁴ 社会福祉法人こころの家族故郷の家神戸

1 施設の特徴

A：市街地から離れ自然豊かな環境にある。機能訓練の充実が特色。定員 40 名。B：「娯楽こそ最大のリハビリ」がテーマの夜間型デイサービス。定員 30 名。C：田園地帯にある小規模型デイサービス。定員 13 名。D：家庭的で温かい雰囲気を目指すデイサービス。定員 15 名。

2 施設利用者の特徴

A：認知症、高次脳機能障害、身体機能低下が顕著な利用者。入浴や機能訓練が目的。後期高齢者（75 歳以上）が多い。B：認知症、糖尿病、腰痛等。70～90 歳代。C：要介護度が比較的軽度な利用者が多い。44 歳～97 歳。D：認知症や変形性関節症の利用者が多い。80～90 歳代。

3 園芸療法対象者の特徴(ICF 分類にもとづく)

心身機能・身体構造：施設により差はあるが身体機能の低下があり、シルバーカーなどの利用者が多い。老化による聴覚・視覚などの感覚機能の衰えや認知症(脳血管性やアルツハイマー型など)の利用者が多い。

活動・参加：要介護認定が主に 1～3 程度で日常生活になんらかの介助が必要。自宅ではほとんど外出機会がなく、他者との交流も少ない。

環境因子：外出や他者との交流を目的にデイサービスを利用している。

個人因子：地元生まれ育ち農作業などの経験者が多い。女性が多い。

4 園芸療法の目標

A：季節感など見当識機能の維持、他者とのコミュニケーション・社会性の維持、適度な運動による新陳代謝の維持、創造性の養成や達成感獲得など。B：植物に触れる園芸活動を通して楽しい時間を過ごす。楽しみながら体・手指を動かす。

園芸活動に参加して施設内で友人を作る。他者とのコミュニケーションを促し、楽しく参加する。園芸（植物を使ったクラフト）を体験し毎日の生活に取り入れる。C：開放感や爽快感、達成感を感じる。D：指先運動による脳の活性化、他者とのコミュニケーション促進。

5 評価方法

A：淡路式園芸療法評価表(AHTAS)；B：AHTAS、淡路式作業能力評価法(AWAAS)；C：作業の様子、表情など；D：AHTAS、AWAAS

6 雇用形態と園芸療法活動形態

A：常勤、看護師と兼務、8 名までのクローズド型；B：非常勤勤務、7 名のセミクローズド型；C：常勤、施設長と兼務、個別でクローズド型、レクリエーションの一環としてオープン型；D：常勤、介護職と兼務、7～10 名のオープン型

7 頻度

A：週 4 回、各曜日で固定メンバー、延べ参加者 30 名程度；B：月 2 回；C：個別は週 3 回、オープン型は不定期；D：月 2 回



8 プログラムの内容

年間を通した、花（ビオラ、葉牡丹など）や野菜（トマト、キュウリ、じゃがいもなど）の栽培、

栽培した植物を利用したクラフト作業（押し花カード、千日紅の花飾りなど）、季節の行事（正月のしめ縄作り、クリスマスリースなど）にまつわる作業。

9 主な成果

時間の見当識機能維持・向上：定期的な活動を続けていくことにより「もう1週間たったな。」と園芸療法の時間を軸に時や季節の流れを感じる機会となっている。

家族との交流促進：自分自身が作った作品を自宅に持ち帰った後、「孫に、おばあちゃんそれかわいいからちょうだいって言われたの」と嬉しそうに話された。

利用者間のコミュニケーション促進、社会性の維持：出来上がった作品を眺めながら会話が生まれ、お互いの作品を褒めあうなどコミュニケーションの場となっている。

意欲の向上：脳梗塞の後遺症により精神的に落ち込んでいた利用者、リハビリテーション目的のデイサービスに通所するが自分自身への不甲斐のなさに落ち込んでいた利用者などが園芸療法に参加してから、楽しみながらできることが増えた結果意欲を取り戻している。



10 課題と展望

対象者の高齢化による作業能力の低下や、認知症の重症化によりプログラムに限界があるため、レイズドベットの活用や卓上でもできるような栽培方法など、活動場所や方法などに、より一層の

工夫や配慮が必要である。

週1回の活動が継続できると、対象者に「今日は園芸の日」という感覚が芽生え、より効果が期待できるが、月1~2回の園芸療法では継続的なかわりが難しく、常に単発的なプログラムとなってしまう。

認知症の対象者が多く、対象者の主観的な評価が難しいため、園芸療法士による観察式評価に限られてしまい、その成果が見えにくい。

園芸療法士だけでは集団プログラムの実施や栽培している植物管理なども難しく、施設職員の協力が必要不可欠である。園芸療法を広めていくためには周囲の方々から理解や協力を得られるような対外的な活動も必要である。



11 まとめ

今回、高齢者デイサービスで園芸療法を実施している4名の園芸療法士の活動を集約し比較した。園芸療法の対象者やその目標、活動内容は共通しているが、常勤あるいは非常勤の違いによる活動頻度の偏り、また同じ常勤雇用されていても兼務する職種において施設から求められる役割も様々であった。最近高齢者デイサービスにおいて“園芸”はレクリエーションとして取り入れられる施設も増えてきたが“園芸療法”として取り入れているところは少ない。これは手軽にできるがゆえに療法士が行うことによる効果が分かりにくいことも一因であると考えられ、園芸療法の成果をどのように広めていくかが課題であると分かった。